

詩同人誌評
第1回
コロナ禍を生きる
中塚鞠子

昨年一月から今年にかけては新型コロナウイルス禍に明け暮れた。スペイン風邪という名のパンデミックが世界中に広がったのは第一次世界大戦最中の一九一八年で、その時のウイルスはH1N1型のインフルエンザだった。当時の死者は五〇〇〇万人とも一億人とも言われている。考えてみれば、今回、約一〇〇年ぶりにおとずれたパンデミックである。この二月で感染者は一億人を超え、死者も二百五十万人になろうとしている。さらにまだ衰えを見せてないのである。第一次世界大戦とスペイン風邪がもたらした厄災により、その後の世界が変わったように、コロナが終息した後、世の中がどう変わるか、詩人たちはこの一年、どう感じてきたかを見てみたいと思った。

本当は、コロナコロナという詩は読みたくない。早く消えてしまつて欲しい。だけど、一〇〇年に一度遭遇した災難だ。書いておかねばならないことは確かだ。コロナが終息したら、二度とこんな詩は書かないから。時代の証言になる。

森ミキエ「2020年ランチタイム」(ひょうたん) 72

テレビは世界各国の新型コロナウイルスの感染状況を放映している

— (略) —

口の中がかわいてくる

魔法瓶の紅茶を飲み干し

マスクをつける

高濃度の酸素をカラダに送りこみたい

とうめいなビニールやアクリルを身にかけて

生きてるみたいだから

— (略) —

コロナ禍での素直な閉塞感を書いている。家に閉じこもつて一般的にはそんな生活だ。

佐野亜利亜「コロナの四月」(潮流詩派) 264

小学校が閉鎖され
町のはずれの公園では
こどもたちが砂場で穴を掘っている

たくさんの小さな手
手

気づいているのだ
やがてちははも 遠く離れた島に隔離され

永遠に家に戻れなくなる日がくることを
その前にみんなでこの穴にかくれよう
からだをかたくよせあつていれば

砂穴の奥まで
ウイルスはおそつてこないはず

— (略) —

これはまた、まあ、なんともあどけない不気味さではある。不安は幻想になる。

神田さよ「ニューヨーク 2020・4・25」(表情) 西宮文芸誌29号

エルムハーストホスピタルセンターで
今日は13人が死亡

病院内は死体があふれている
死者たちを冷凍車両に保管した

保管場所が間に合わない
死者は汚染された物体

いのちが

生きた証が

こんなにも

そまつに

今日の死者の数として記録される

――(略)――

死者のうち

ヒスパニア系 黒人系 が62パーセント

という

その日暮らしの人びとは働きに行かなく

てはならない

地下鉄に乗らなくてはならない

――(略)――

テレビなどの報道からの詩であるが、報道

の核心を掴んでうまく詩にしている。

この二月現在でさえ、一日感染者20万人と

いうアメリカ。死体があふれて、死体はす

でに物、汚物として扱われている実態、を伝え

ている。世界中で、感染者、死者は、強いリ

ーダーであるはずのアメリカが皮肉なことに

トップなのだ。

民主主義が壊れる、といった人があるが、

個人の自由に対する権利意識の強いところほ

ど、感染がひどい状況を呈しているようだ。

情報を信じるなら、中国・北朝鮮などの人権
無視の強権を発動できる共産圏ほど感染は早
く収束する。しかし情報は信じられるか？

貧富の差や、人種差別が人々を分断する。

災害や、異常事態が起きるとき、人間の本性

がむきだしになる。

坂田トヨ子「時が止まったような」(いのち

の籠) 46号)

がらんとした街は

時が止まったようだった

けれど、時は確かに流れている

――(略)――

病院も施設も面会謝絶

父の白寿の祝いも出来なくて

母は相変わらず電話で訴える

――(略)――

世界中がコロナウイルスと戦っているこ

の時も

沖繩の基地を作る動きは止まらないから

止めるための座り込みも止められない

座り込みをして抗議している人たちも、ソ

ーシャルディスタンス(嫌な言葉だ)。間を

空けて座っているという。ウイルスとの闘い

には武器も基地もいらない、私たちの税金が、

困っている人の所へ行かないで、無駄なとこ

ろで使われている、と書く庶民感覚は実感だ。

後藤億嶺「子供たちの伸びやかな声が聴きた

い」(いのちの籠) 46号)

「明るく楽しく暮らしましょう」と

語り合っていた矢先のこと

三月二日夕方、妻が道で転んで

左大腿骨骨折、左腕骨折の大けがをしてし

まった

――(略)――

新型コロナウイルスを疑われたのか

手術は半月後まで延期された。

手術の日、オベ室に運ばれる

ストレッチャーの横に付き添ったきり

三か月という長い入院の間、面会できな

った

作者も会えなくて心配だっただろうが、入

院された奥さんも心細かったことは想像に余

りある。病院も老人施設も、クラスターを恐

れて、面会はできなくなった。窓越しに、リ

モートで、と異様な面会が今も続く。この詩

は、〈治山治水、復興支援、科学と医学に力

を注いでほしい／小さな子供たちの／楽しい

遊びの伸びやかな声を聞きたい〉で終わる。

千葉みつ子「7枚のマスク」(潮流詩派) 264

号)

- 8/31 ブレオナ・テイラー
- 9/2 エライジャ・マクレーン
- 9/5 アマッド・アーバリー
- 9/7 トレイボン・マーティン
- 9/9 ジョージ・フロイド
- 9/11 フィラード・カステイル
- 9/13 タミル/ライス

黒人に対する人種差別
警察による非道な暴力

犠牲者の名をマスクにするし

全米オープン戦に臨んだ大坂なおみ選手

人種差別に抗議する意志を世界に発信した

マスクだけで人々の心に訴えかけられる。

映像は世界中に流れ誰もが感動した。理不尽な死を受けた人々の名も、その個人の人格を守ろうとした大阪なおみ選手も記憶されるだろう。

江口節「その日」(「多島海」38号)から

厨房のステンレスは

隅から隅まで磨かれている

コンロの向こうはとりわけ丁寧

—(略)—

右肩下がりの時代を

知恵を絞り耐え忍んできたが

衝撃波は海を越えて襲って来た

明日はもうないと決まった

レストランで

コックやフロア係

受付も経理も送迎バスの運転手も

最後の給料を受け取る

—(略)—

この良心的な店主は退職金の代わりに、店の絵や壺やお皿などを包んで渡すのだ。哀惜の念を美しく表現している。それでも店主も従業員たちも、その日から無職になるのである。各々には家庭があり生活がある。突然のコロナの出現は、そうした生活を壊していくのだ。

コロナの時代を詩で書くのは難しい。従ってエッセイが多い。

「プライム」52号の後恵子「恐怖のコロナウイルスで生活が変化」を見ると

—略—すべての活動は中止になった。

盲人と弱視者のための対面リーディングのボランティアは一か月一、二回していたのが六か月中止。市民病院の図書整理のボランティアは月一回半日だったが、一年近

く中止。

—(略)—

仕事人でないので、生活のための収入を心配する必要もなく、年金暮らし生活は自由に行動できるが、コロナウイルスに感染すると、高齢者は急速に臓器の機能が低下して、死ぬ危険が高い。ウイルスは眼に見えないから、不安がつのる。

と、まあ本音の所、高齢者は生活にも困らないし、うろろろしなければ安全なのである。しかしその余波で、盲人や弱視者、入院患者さんたちは文化的に飢えてしまう。

文化活動は不要不急ではないのか。本を読むことも音楽を聴くことも映画を見ることも生活に欠かせないものだった。コロナで生活に欠かすために確認したのだった。コロナでなくても経済を優先して、どんどん文化を切り捨てていく市や府があったが。

運動もそうだ。いろいろな運動ができなくなる。人間はフラストレーションを起こす。先日の日曜日の公園の周りに集まった人たちを見て、心斎橋みたいやな、といった人がいる。公園しか行けるところがないのだ。

檜崎秀子「コロナマスク大作戦」(「玉蘭」7号)

感染拡大のリスクが高い密集・密閉・密接

△三密Vを避けて、マスクをせよと言う。

——(略)——

押し入れからミシンを出すのは大変なので、久しぶりに手縫いでいこうと決める。一番目立つのは、正面の鼻先から顎にかけての曲線だから、ここは縫って開かず片側に倒し、表から丁寧に半返しで押さえていった。(略)

作りながら私は、このマスクの柄はだれにしようかしら、などと考えていた。そして四月の末までに、結局十四枚ものマスクを縫い上げたのだった。

このうち四枚はおばあちゃん(私の義姉)を含む姪の家へ、三枚は甥の家族へ、一枚は高松の友人Yさんへ送ったが……

作者は昨年九月で卒寿というお歳の方。手持ちの花模様のローンのハンカチの表地にガーゼを裏地に当てた手縫いのマスクを、不足して困っている離れて暮らす家族に送るのだけれども、コロナならではの暖かい交流がある。いかにも通気性の良い素敵なマスクを想像する。針仕事で、みんなに喜んでもらえるなんてことは最近では少ないことだ。何でも買えばある世の中になってしまっているから。

三重詩人「25号も小特集「コロナ禍を生きる」

を載せている。伊藤眞司「コロナ禍を考える」を見てみる。

人間のあくなき資本主義の追及からの森林の開発により、奥地に眠っていた新型コロナウィルス性肺炎を媒介する菌が、人間界に放出され人間の体に居着いてしまった。人の行き来によって世界中に広まった。(略)

このコロナウィルス性肺炎の嵐の過ぎるのを自粛して待つしかないのだろうか。いやそうではなく、この感染症によって人間社会は、日本も世界も試されているのだと思う。ここで一つ声を大にして述べておきたいのは、この感染症(新型コロナウイルス)に対して、病気への恐れから差別や偏見を生み出し、地域や村社会の分断や仲たがいをおこさせる、人間関係に亀裂を生む怖さを秘めていることである。

ウィルスがどこから来たのかは謎であるが、既に世界は分断されていて、原因の追及さえ出来ないのだ。作者は、コロナのせいでは人種差別、沖縄の地位協定などが浮かび上がったことを示唆している。繋がっていると見えても、何か事が起きるとそれぞれ国のエゴと本音が浮かび上がるのだ。今世紀初めからその傾向は見えていた。コロナウィル

スの出現によって、それが顕著になった。

「ア・テンボ」号58でも「それぞれのコロナ考」と特集を組んでいる。マスクについて、ソーシャルディスタンス、ウィズコロナなどというきみようなことばについて。直接職を失った人、間接的に食べられなくなった人のこと、など、それぞれのコロナ考である。牧田榮子さんの落ち着いたエッセイを見る。

新聞で新型コロナウィルスを知ったのは二〇二〇年一月九日だった。小さい記事で、これまでの新型コロナや中東呼吸器症候群とは種類が異なる、とある。春節の人の移動がとも懸念されつつ瞬く間に全国に感染が拡大する。店頭からマスクが消え、消毒薬が姿を消した。大急ぎで布で縫い始める。米シカゴ大の布マスクの微粒子遮断実験や「富岳」の咳の飛沫の拡散を布マスクは七、八割キャッチする、と賢くなつてゆく。

「天秤宮」50号は一九九〇年発刊、二〇二〇年一〇月で五〇号を出して終刊。立派な冊子であった。発行人は宮内洋子である。谷口哲郎は「希望を見出すまで」で

「希望」とは「かつてなかったもの」で「こ

れから現れるもの」そして「新しく、よりよいもの」と規定している。さらにそれは可能性の問題ではなく、潜在性として、私たちの存在を突き上げ、湧き上がってきているものだ

という。とても素敵なエッセイだ。コロナ後、そうあってほしいと願う。

「歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語る」（孫引きだがアリストテレス「詩学」より）。いい言葉だ。

紀元前の人と言った言葉が今も通用するのは、人間は何と進歩していないことか。

* * *

今回から松本衆司さんが「詩時評（詩集評）」を、中塚鞠子が「詩同人誌評」を担当することになりました。どうぞよろしくお願いたします。

全国には膨大な同人詩誌が発行されており、手元に届くのは、その一部かもしれませんが、できれば個人の詩を読みながら、同人詩誌の特徴も見えていきたいと思っています。